

運命を巡る昔話

—KHM 29「3本の金髪を持つ悪魔」と「産神問答」を比較して

細 谷 瑞 枝

運命が予言されたとき、人はどのようにその運命と向き合うものだろうか。洋の東西を問わず、運命を巡る昔話は多々あるが、本稿ではグリム兄弟による『子どもと家庭の昔話集Kinder- und Hausmärchen（以下、KHMと記す）』29番「3本の金髪を持つ悪魔」を起点にして、婚姻に関する運命を扱った昔話に見られるヨーロッパと東アジアの運命観について考察を試みたい。

1. 「3本の金髪を持つ悪魔」の構成

最初に「3本の金髪を持つ悪魔」のあらすじを記す。

ある貧しい家に、幸運の印とされる福の皮（羊膜）を被った男の子が生まれ、14歳で王の娘と結婚すると予言される。予言に腹を立てた王は、素性を伏せて両親からこの子を買取り、箱に入れて川に投げ入れ、殺そうとする。しかし、箱は水車小屋に流れ着き、男の子はそこで育てられる。

若者に成長した男の子に偶然出会った王は、彼に妃宛ての手紙を託して城へ行かせる。森で迷った彼を泊めてやった盗賊たちは、彼を殺せという手紙の内容を、彼と王の娘を結婚させよと書き換え、2人は結婚する。

城に戻って事実を知った王は、王女との結婚を続けるためには、地獄にいる悪魔の金髪を3本持ってくるようにと若者に命じる。若者は、途中の2つの町で「広場の井戸が枯れたのはなぜか」、「金のリングが実らなくなったのはなぜか」、さらに地獄の手前の河の渡し守の「どうしたらこの仕事から解放されるのか」という質問の答えを請け負って、悪魔の家につく。

悪魔の母親が、若者に代わって3つの質問の答えと金髪3本を手に入れてくれる。帰路、若者は2つの町で4頭のロバに山積みにした金を答えのお礼にもらう。

王はようやく若者を婿と認めるが、自分も金を手に入れようと地獄に向かい、渡し守の仕事を永遠にすることになる。

ボルテ・ポリーフカは、「3本の金髪を持つ悪魔」のモチーフを次のように整理している。

A1) 将来の義父による新生児の迫害、とA2) ウリヤの手紙を王女との結婚の命令に交換。

B) 義父が主人公に、悪魔（巨人、竜、鳥）の髪3本を取りに行かせる。

- C) 出会ったものたちが彼に質問を託す。
- D) 怪物の妻が、彼を匿い、彼のために髪の毛3本と質問の答えを手に入れる。
- E) 彼はお礼を受け取る、そして F) 王女と結婚する。
- G) 義父は同じ道を行き、渡し守と交代することになる。

あらすじとモチーフ構成から分かるように、この話は、主人公と王女の結婚という予言が成就するA1) A2) までの前半と、それでもなお運命に逆らおうとする王が主人公を亡き者にしようと難題を課す後半に分かれる。

本稿では、まず前半のA1) のモチーフ、生まれたばかりの子どもの将来の結婚相手に関する予言が含まれる話をヨーロッパとアジアに分けて検討する。

2. 将来の結婚相手に関する予言

2-1 ヨーロッパ

「3本の金髪を持つ悪魔」は、『国際昔話型カタログThe Types of International Folktales ((以下、ATUと記す)』の461番「悪魔の3本のあごひげ」とATU930「予言」の組み合わせだったものとされる。ATU461番の筋の要約は、「貧しい若者が王(金持ち)の娘と結婚したが。娘の父親は、悪魔の3本のひげを若者に取りに行かせて、若者を追い払おうとする」と始まり、主人公の結婚に関する予言の要素は含まれない。しかし、類話の半数以上は、導入部のエピソードとしてATU930を伴う¹⁾。

他方、ATU930「予言」は、「将来偉くなること、または裕福な少女との結婚が予言されている少年に関する様々な説話を包摂する」雑録話型で、主人公と王女の結婚以降のエピソードは含まないのだが²⁾、本稿では、結婚後にATU461とは異なるエピソードを含むアーナルネ・トムソンの『昔話の型 The Types of the Folktales (以下、ATと記す)』の930番「予言」も含めて考察の対象とする。

身分違いの子どもたちが結婚するという予言を知ると、娘の父親は、男の子を殺害して運命から逃れようとする。この予言を知って実現を妨げようとするのは娘の父親だけであり、娘とその母親は結婚相手の身分よりも書き換えられた手紙の内容を父親の意向と信じて優先し、男の子の方は予言を知らない。また、予言をするのは、主キリストや運命の女神たちのように超自然的で絶対的な存在のこともある³⁾が、夢や星のお告げ⁴⁾、さらには名親を引き受けた乞食の単なる祝福のことは⁵⁾などその実現が疑わしいものもある。それに関わらず、父親は予言を信じて、何とか運命を変えようとする。

1 Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography*. Helsinki 2011, Part 1 S.271f.

2 Ibid., S.568.

3 例えば、ロシアの「金持ちマルコ *Marko, der Reiche*」では、主キリストと聖ニコラウスが予言する。*Marko, der Reiche*. In: *August von Löwis of Menar: Russische Volksmärchen. Europäische Märchen und Sagen*, S. 21864ff.

4 ノルウェイの「金持ちペーター小間物屋 *Der reiche Peter Kräme*」では占星術師が予言し、ドイツの「牧童と商人の娘」では母親が3度同じ夢を見る。*Der reiche Peter Kräme*. In: *Asbjørnsen/Jörgen Moe: Norwegische Volksmärchen. Europäische Märchen und Sagen*, S. 16881ff.

小澤俊夫編訳「牧童と商人の娘」、『世界の民話1』、ぎょうせい、1999年、32-37頁。

2-2 日本および東アジア

出生時になされる運命の予言のうち、婚姻に関する要素を含む日本の昔話としては、まず『日本昔話大成（以下、大成と記す）』151A「産神問答」が挙げられる。その構成は、以下に示すように、「3本の金髪を持つ悪魔」と同じく前半、後半に分かれる。

A

- 一、(a) ある男が山の祠（木の洞）に泊まる。
(b) 海岸の寄り木を枕に寝ている。
男は一人または二人あるいは第三者。身分の上の者と低い者。
- 二、神々が彼らの家に生まれる子供の将来を語っているのを聞く。女兒には福がある。
男児には福がない。
- 三、神の予言を聞いた両親は生まれた子供を許婚にする。
- 四、彼らは果たして裕福になる。

B

- 一、夫は神の予言を信ぜず妻を嫌って離縁する。夫は貧乏になる。
- 二、女房は再婚し、黄金、酒泉を発見して富む。
- 三、先夫はそこに物乞いする。あるいは箕を売りに行く。
- 四、元の女房が米・味噌・握り飯の中に小判を入れて与える。
- 五、(a) 先夫はそれを知らないで捨てる。
(b) それを知って前非を悔いる。
- 六、もしくはその飯をほかのものにやる。もらったものは裕福になる。

ヨーロッパの話では、主人公の男の子は貧しくて社会的地位も低いと決まっているが、日本の話では、男の子も女の子も長者の子、あるいは身分の上下には触れていない話もかなりある⁶。身分の上下がある場合は、ヨーロッパの話とは逆に女の子が乞食や下女の娘で、男の子は旦那や長者の息子であるが、ヨーロッパと決定的に異なるのは、身分が高い男の子の父親が自ら進んで出自の卑しい女の子との縁組を結ぶことである。また、共に長者である双方の父親が、神の予言と一緒に聞いた場合でも、福がある女の子の父親が福のない男の子との縁組を断ることはない。日本の昔話では、福がない生まれの子どもの父親は、子どもの運そのものを変えるのではなく、生まれながらに福を持つ者と結婚させることによって、福にあやかろうとする。不都合な運命が予言されたとき、その運命を断ち切って変えようとするのがヨーロッパであれば、予言そのものは受け入れたうえで、不幸を回避できそうな方法を考え出すのが日本のあり方といえるのではないか。

予言を受け入れるといえ、出生時ではないが、婚姻にまつわる運命の話はほかにもある。「産神問答」と近い関係にある「炭焼長者・初婚型」（大成149A）である。ここでは、

5 Von der Stadt Sedelfia und dem Vogel Fabian. In: Pröhle: Märchen für die Jugend. Deutsche Märchen und Sagen, S. 38851ff. (「ゼーデルフィアの町とファビアン鳥について」)

6 『日本昔話大成』第3巻に収録されている類話のうち、子どもたちの父親の身分が同等であるのは9話、男の子の親の身分が高く、女の子の身分が低いのは13話である。

殿様や長者の年頃の娘が、なぜか縁遠く、神のお告げや占いの結果、山奥の炭焼きのところに嫁入りすることになる。身分違いの申し出に、最初は断る炭焼きだが、結局は結婚する。女房が小判を渡して買い物に行かせると、炭焼きはそれを水鳥に投げて無駄にしまう。小判の価値を話して聞かせると、それなら窯の周りにいくらでもあると炭焼きが言い、2人は小判を集めて大金持ちになる、という話である。

身分の高い娘と低い若者の結婚、という点では、「炭焼長者」の方が「産神問答」より、「3本の金髪を持つ悪魔」に近い。しかし、すでに述べたように「3本の金髪を持つ悪魔」では、予言のモチーフがない類話も半数近くあるのに対し、「炭焼長者」では、神のお告げ、易占いなどの予言を含む話が圧倒的に多い⁷。そして、神の思し召し、運命とは言うものの、当座は不幸に見える縁組に娘が不服を漏らすのは、兵庫県城崎郡のわずか1例でしかない。ここにも、運命、予言に逆らわずに従うという姿勢が見られ、それが幸運につながる。

また、娘が貧しい漁師と結婚したことに怒って会おうとしない父親（鹿児島県沖永良部島）と大晦日に炭焼きから米一升を受けとった娘が縁が悪いと勘当した父親（石川県珠洲市）を除くと、「炭焼長者」では父親のことはほとんど触れられない。同じ東アジアでも、中国と朝鮮の「炭焼長者・初婚型」では、父親が3人の娘たちに今の暮らしができるのは誰のおかげかと尋ねるところから話が始まる。姉2人は、父親のおかげだと答えるが、末娘は、自分の福分のためだと言うので、父親は怒って末娘を家から追い出す。貧しい炭焼きと結婚した末娘は、金を見つけて裕福になり、姉娘たちから追い出されて零落した父親が末娘と再会するところで終わる⁸。このように、中韓と比べても、日本の父親の存在感の希薄さは特徴的である。

3. 結婚後の課題

3-1 ヨーロッパ

「3本の金髪を持つ悪魔」の前半で、主人公の若者を殺害しようとして失敗した王は、後半、悪魔の金髪3本を取りに地獄へ行くように命じて、彼を体よく追放しようとする。前半では運に命を救われた主人公だが、後半になると自覚的に行動しなければならない。若者が手に入れるべき髪には悪魔の知恵と力が宿っており、だからこそ髪を抜くタイミングで請け負った質問の答えが分かり、その答えを依頼者に伝えることで、主人公は報酬を得る。悪魔の髪を手に入れることで、彼は王が出した困難な課題を見事に解決しただけでなく、一連の行動を通して、王にも勝る財を得て王女と結婚するにふさわしい者であると証明する。悪魔の母親の援助があったとはいえ、若者が目的を達したのは、幸運によってだけではなく、彼自身の勇氣と行動によるものである⁹。つまり、後半に関する限り、「3本の金髪を持つ悪魔」では、「生まれながらの運命の定め」というテーマは薄れてしまっている。

7 「大成149A」では、予言がある話が40以上あるのに対し、身分の高い娘が突然嫁にしてくれと押しかけてくる話は10話に満たない。

8 例えば、鶴野祐介編著（2016）、127-130頁に採録されている「自分の福」（韓国）や「正月に娘を嫁に出す」（中国）を参照のこと。

9 Ulrich Marzolph: *Haare; Drei H. vom Bart des Teufels*: In *EM* 6, S.343-348参照のこと。

ところで、誰かの頼みを引き受けながら悪魔のところに行くというモチーフは、別の話型、ATU460A「神（幸運）への旅」とATU460B「幸運の女神を探しに行く旅」にも現れ、タイトルからも分かるように、このモチーフはこれらの話型において運命と関わっている。それぞれの話の筋は、おおよそ以下の通りである。

ATU460A「神（運命の女神）への旅」

乞食が、自分がなぜ貧乏なのか知りたいと思う。あるいは、神が貧者への喜捨を何倍にもして返してくれると聞いた若者が、自分はまだ返してもらっていないと神のところへ文句を言いに出かける。途中で会った動物、植物、人間から神に聞いてきてほしい質問を頼まれ、引き受ける。神はそれぞれの答えを教えてくれ、彼は帰り道にそれを伝えて報酬を得る。

ATU460B「幸運の女神を探しに行く旅」

2人兄弟が農場に一緒に住んでいるが、ひとりしか働かない。農地を分けることにするが、よく働く者の方が、怠け者より収穫が少ない。そこで働き者は幸運の女神のところに理由を聞きに行くことにする。途中で、ほかの人から難題の原因と解決する方法を女神に聞いてきてほしいと頼まれ、引き受ける。

幸運の女神は、不幸の原因は、彼が不運な日に生まれたからだと説明する。帰り道、彼は教えてもらった方法を依頼者たちに伝える。

時に、彼が幸運な女性と結婚し、彼女が彼に幸運をもたらすこともある。のちに農場の持ち主について尋ねられ、事実ではない答えをし、運を失う。

この話型には、主人公を厄介払いしたい王の意向は存在しないので、赴く先は、悪魔や竜ではなく、（女）神のところだが、現実ではない世界、すなわち、超自然的存在が住む異界、彼岸とみれば同じことである。神または運命に対して不服がある主人公は、自ら決意して運命を支配する存在のところへ出発する。Aでは、愚鈍ともいえる無邪気さで神のことばを信じる主人公が、往路で引き受けた質問の答えを神に聞き、復路でそれを伝えてお礼を手にし、結果として神のことばは真実であることが間接的に証明される。中には教会にある磔刑像のイエスとことばを交わす奇跡を体験した者として、主人公が最後に天に召されるという聖者伝的な結末を迎える話もある¹⁰。

それに比べると、Bでは、運命の（女）神自身の暮らしぶりが、栄華の極みから極貧にいたるまで日々次第に変化していき、人間の運命は、誕生のときに運命の女神がどのような暮らしをしていたかによるとされる。ハッピーエンドのATU460Aに対し、Bでは運命は変えようがないという悲観的な世界観に傾くが、興味深いのは、一時的なものであれ、運のよい女性との結婚が男の不運を補うことで、これは日本の「産神問答」で運のない男の子の父親が息子のために考えた方法と同じである。ATUの筋の要約によると、この運も

10 Von dem frommen Jüngling, der nach Rom ging. In: Laura Gonzenbach: *Sicilianische Märchen. Europäische Märchen und Sagen*, S. 10462ff. (「ローマに行った信心深い若者について」)

最終的には失ってしまうことになり、この点も日本の話と一致するが、中には最後まで運を失わずに済む話もいくつかある¹¹。例えば、セルビアの「運命」という話では、人間の運命の決まり方について一通り明かした女神が、不運な日に生まれた主人公がそれでも幸せになるには、幸せな日に生まれた女性と結婚すればいいと助言する。女神は、主人公の身近にいる幸運な生まれの女性も教えてくれるが、すべての財産は妻のものとするようにと釘を刺す。女神の言う相手と結婚して裕福に暮らしていた主人公は、ある日、財産は自分のものとうっかり口を滑らせて、すべてを失いそうになるが、すぐに妻のものと言い直して、そのまま幸せに暮らすことができる¹²。

3-2 日本および東アジア

「産神問答」では、福のない男の子と福のある女の子は、成長して親たちの約束通り結婚し、しばらくは豊かに暮らす。しかし、夫は怠け心から福の神を追出し、それを知った妻は家を出る。あるいは、夫が妻の卑しい出自を嫌って離縁する。妻は再婚し、再び幸せに暮らす。夫は零落する。つまり、結局、夫が妻の福に頼ることはできない。日本の話では、男の父親こそ夫婦の福分について知っているが、おそらくは神意を口外することをはばかり、本人には知らせない。それゆえ、妻の福分のおかげで家業が繁盛しているのに、夫はゆっくり朝寝をしたいと思い、福の神に矢を射るような罰当たりな行動をとって落ちぶれる。

この点は、既述したように、ヨーロッパの話の主人公が、幸運な女性と結婚して豊かになっても、財はすべて妻のものとしておかねばならず、軽率に富は自分のものと口外しようものならすべてを失うということと重なる。だが、異なるのは主人公の意識である。ヨーロッパの主人公は、結婚後の幸せが妻の持ち分であることを知っている。彼自身が運命の女神に聞いたことだからである。そして、運命の女神は、せっかくここまで来たのだから、と本来なら変えられない運命をかわす、いわば裏技を彼に教えてくれたわけである。こう考えると、不運なまま終わるはずだった主人公の人生を変えたのは、その不運に憤り、運命の女神に訳を聞きに行こうと決意して行動に移した主人公の生き方であり、結婚によって手に入れた幸せを自分の運のほどをわきまえて持ち続けられるか、驕って失うかも本人次第だと言えよう。つまり、人間が運命に関与する余地がわずかながら残されている。

一方、日本の話の主人公は、なんといっても自分の福の少なさを知らないがゆえに、また、生まれ落ちた家が豊かであればこそ、父親が取り結んだ縁を思い上がって自ら手放してしまうのである。

ところで、自分の運命を聞きに神を訪ねていく途中でほかの者の質問も預かって答えを持ち帰る話は、世界中に広く分布し、東アジアにもたくさんある。一例として、韓国の「西域国へ福を求めに行く」¹³のあらすじを次に記す。

11 Sebastian Schott: *Reise zu Gott (zum Glück)*: In *EM* 11, S 514.

12 *Das Schicksal*. In: Vuk Stephanovic Karadzic: *Volksmärchen der Serben. Europäische Märchen und Sagen*, S. 25652ff. (「運命」)

13 崔仁鶴・巖鎔姫編著 (2016) 130-135頁。

母と二人暮らしの貧しい若者が、あまりの貧しさに福を求めて、ひとり西域国へ旅立つ。途中で、若く美しい未亡人に、仏に会ったら自分にいい伴侶が見つかるように頼んでほしいといわれ、引き受ける。次に3人の子どもたちに黄金の花を咲かせられないわけを仏に聞いてきてほしいと頼まれる。さらに、大蛇が天に昇れないわけを仏に聞いてくると約束し、それと引き換えに、大きな川を渡してもらう。

ようやく西域国に着くと、まず門番のところで入れろ、入れられない、の押し問答になるが、仏自身が声をかけてくれ、中に入る。ところが、福を求めてきたと告げると、「生まれた時に福がないのを、私にどうしろというのだ。私にできることはないので、すぐに帰りなさい」といわれ、仏とも帰れ、帰らない、の押し問答を繰り返すが、結局、頼まれたことの答えだけを教えてもらって引きさがる。

帰路、仏の答えのお礼に、大蛇からは如意珠、子どもたちからは二枚の黄金をもらい、未亡人と結婚し、母親を呼び寄せ、幸せに暮らす。

この話で目立つのは、福を求める主人公の思いの強さと、若者の福に関して仏が何もできないと明言していることである。同じく、中国の昔話でも、貧しい若者が自分の福を求めて神仙や活仏を訪ね、途中で3つの質問を頼まれる。神仙には会えたものの、頼まれた3つの質問をしたところで神仙は姿を消してしまう。韓国のように、運はどうしようもないと突き放されることこそないが、自分については何も聞けないまま主人公は帰ることになる。しかし、質問の答えを伝えたことにより、結局は幸せを手に入れるのは韓国の話と同じである¹⁴。

日本では、大成157「山神と童子」がこの話型にあたる。そのひとつ、「山神と孝行息子」のあらすじは以下の通りである。

母と二人で薪を売って、その日暮らしをしている息子が、山で木を切っていると、どこからともなく現れた爺が息子の弁当を食べてしまう。息子が何も言えずにいと、福を与えるから、明日、山頂まで来いと言われる。

翌日、言われた通り出かける。途中の茶屋で金なる木に花が咲かないわけを、別の茶屋では一人娘の大病のわけを尋ねてきてくれと頼まれて、引き受ける。

山頂の御殿には昨日の爺がいて、泣きわめく赤ん坊を輪切りして息子に食べるように勧める。躊躇するが、爺に倣って食べてみると泣子菓子という珍味である。息子が茶屋で頼まれたことを尋ねると、爺はどうしたらいいかを教えてくれるが、息子自身の福については何も言わずに家ごと消えてしまう。

山を下って、それぞれの茶屋に爺の教えを伝えと、どちらの家でも息子に養子になってほしいと言い出して、結局、半月ずつ2軒の家の養子になることにした。

日本の話の主人公も貧しいことは貧しいが、その苦しい境遇を神に訴えてなんとかしてもらおうと旅立つのではないところが独特である。『日本昔話大成』には、「山神と孝行息

14 中国の話については、馬場英子ほか編訳（2007）62-66頁の「樹童」およびその注を参照のこと。

子」以外に4話が収録されているが、そのうち3話に山の神である爺が主人公の弁当を食べてしまうというくだりがある¹⁵。「山神と孝行息子」では1日だけだが、たいてい3日、それも弁当を2つ持っていけば、2つ、3つ持っていけば3つとも食べられてしまう。この時、主人公はこの爺が山の神だとは知らないが、それでも腹は立てない。山の神はここでひそかに主人公の心根を試しているともいえそうだ。主人公を試す、といえは生きた赤ん坊にみえる泣き菓子を食べよ、というのもそうだが、ここで試されているのは勇気や度胸ばかりではなく、山の神の勧めに素直に従えるかどうかでもあろう。あるいは、神と食を共にすることによって、主人公は福を得るにふさわしい者になったのかもしれない。ただし、この肝試しのような供応があるのは「孝行息子と山神」だけで、ほかの類話では爺が自分の正体を明かし、人の頼みごとを聞きながら、天竺の寺まで来いと言って姿を消す¹⁶。主人公が天竺に着くと、爺がいて、頼まれた難題の解決法を教えてくれ、帰路で主人公が富と妻を得て幸せになるのは、中国や韓国の話と同様である。

このように比較してみると、日本の話はかなり異質である。ヨーロッパはもとより、中国、韓国の話においても、主人公は自分の不遇さに不満を持って神や仏のところに旅立つのに対し、日本では、神の方から主人公のもとに姿を現す。あるいは、それは福を授けるにふさわしい人物かどうかのテストだったのかもしれないが、話を額面通りにたどれば、主人公の弁当が福と交換され、主人公は福を約束されて、山頂、もしくは天竺へ向かい、約束通り幸福になる。

中国と韓国に関していえば、仏も神仙も主人公に直接幸運を授けるわけではなく、ほかの人の質問を快く引き受ける主人公の態度が、帰路において福をもたらすという意味では、ヨーロッパの460A「神への旅」に近い。ただし、ヨーロッパの話では、最初に「神は貧しい者への喜捨を何倍にもして返しくださる」という教えが明示されているので、結果としての幸福はやはり神の力によるものと読めるのに対して、中韓の場合は、仏自身が運は変えられないと明言する、または、主人公自身の願いを聞く前に姿を消してしまうので、仏や神仙は登場するものの、その力で主人公の運命が好転したとまでは言いきれない。ヨーロッパの神が運命を決定するのに対し、アジアの仏は運命を決めるのではなく、見通している存在である。

4. 運命との向き合い方

以上、運命と予言をテーマにした昔話を見てきたが、改めて「三本の金髪を持つ悪魔」と「産神問答」を中心にして、ヨーロッパと東アジアの運命観を比較してみたい。

話の前半で、生まれたばかりの主人公の結婚相手が予言されるとき、ヨーロッパでは将来の義父と婿が対になり、前者が後者を排除しようとする。身分の上下でいえば、前者が上、後者が下であり、国という社会における位置関係でみれば、前者が中心にいて、周縁にいる後者を謀殺しようとする。しかし、この試みは失敗する。すなわち、運命は変えら

15 残りの1話では、人相見に福があるといわれて、旅に出る。この話でも、出発のときから、幸運は予告されている。

16 あるいは、人の伝言を頼まれてはならないと言われるが、主人公はそれでも頼みを聞く。天竺に着くと、それは心試しであったと言われる。

れない。

日本の「産神問答」では、義父と嫁が対になり、前者は、息子と結婚させることで後者の運を取り込もうとする。身分の上下でいえば、両者は共に上、もしくは前者が上で後者が下だが、福分の多寡でいえば、前者の息子が下で嫁が上という二重構造になっている。嫁が周縁部にいた場合でも、結婚によって中心へ移動し、若夫婦は身分において上に位置することとなる。つまり、福が少ないとされた息子の運命は変えられたかに見える。

婚姻に関する予言が年頃になってからなされる日本の「炭焼長者」では、すでに確認してきたように、娘の父親は影が薄く、社会の中心に育った娘（妻）と周縁部で貧しく暮らす炭焼き（夫）が対になる。注目したいのは、親世代と子世代という縦の関係ではなく、妻と夫の横の関係が問題になっていることである。親世代で見れば、若夫婦の生まれに差はあるが、娘が神意に従って、炭焼きと結婚して子世代となると、それまで見過ごされてきた窯のまわりの金という新たな富が発見されて、夫婦は共に裕福になる。この話の主人公である娘は、運命に関する予言を変えようとは全くせず、むしろためらう炭焼きに結婚を頼み込んでさえいる。ここには、運命を受け入れることが最後には幸せにつながるというメッセージが感じられる。

同じ話型の「炭焼長者」でも、中国と韓国の場合は、実父と娘という対であり、世代でいえば、縦の関係になる。実の親子であるから、ともに裕福で、身分も高いのであるが、それを自分の力で成し遂げたとする父と、あくまで運であるとする末娘は対立する。家を追い出された末娘の身分は下がり、社会の周縁部へ移動するが、炭焼きとの結婚で再び上昇する。神託の要素がないので、運命を変えようという展開にはならないが、持って生まれた運が人生を決定するという考え方でこの話は成り立っており、その意味ではここでも運命は変えられない。

話の後半になると、「3本の金髪を持つ悪魔」では、不本意ながら義父となった王が、王女と結婚して社会の中心にいる婿を悪魔の金髪を取ってこいという難題と共に異界に送り出し、再び抹殺をはかる。つまり、義父と婿の対が対立する構図は前半と同じで変わらない。だが、主人公は課題を果たして帰還し、逆に王が社会の周縁の最外周、異界との境界にとどまることになる。今や義父の王国の中心の座を婿が占め、運命は変えられないまま予言通り決定する。

この結末は、一見するところ、裕福に暮らす末娘と零落した父親という中韓の「炭焼長者」の最後の構図に似ている。しかし、ヨーロッパの話の方は、結局のところ、元からある社会の中心が世代交替りしただけなのに対して、アジアの話の娘たちは父親の財産を継ぐのではなく、夫と新しい富を築くのであり、社会的には別の中心が形成されている。このことは、父親の存在が希薄な日本の「炭焼長者」にも当てはまる。

「産神問答」の後半では、義父と嫁という縦の関係の対が、結婚後は夫と妻という横の関係に変わる。元々不釣り合いだったこの夫婦は離縁し、再婚した妻は裕福になり、豊かだった夫の家は没落する、つまり、結婚によって避けられたかに見えた運命は、やはり変えられない。だが、子の世代と共に社会に新しい中心ができる日中韓の「炭焼長者」と同じように、妻とその再婚相手は社会の新しい中心となり、社会構造は変わっている。

予言された運命は変えられない。本稿で確認してきたように、これが昔話における基本

的な運命観であり、この点はヨーロッパでも東アジアでも同じである。しかし、運命が予言されたとき、東アジアではそれを否定せずに受け入る傾向が強く、結果的に社会構造もが変化していく柔軟性を見せるのに対し、不都合な運命を何としても断ち切ろうとするヨーロッパでは、個人の運命こそ変えられず、世代は交代するというものの、既存の社会秩序そのものは変わらずに存続していく。

だが、運命がいつも予言や夢で明らかになるわけではない。ここで、ほかの者の質問を引き受けながら異界に向かい、答えを得て帰るというモチーフと運命の関係について再考しよう。このモチーフは、「3本の金髪を持つ悪魔」の中では、求婚者への課題と組み合わせられ、主人公は異界への旅立ちを強いられるのだが、上述したように求婚者テストとは無関係に、主人公が自分の運のなさに疑義を感じて自ら決意して出発する話型もある。子どもの誕生のときに結婚相手が予言されるのとは違って、ここにあるのは、主人公がまじめに働いても貧乏だという事実だけであり、それは「運命」とまではいえないかもしれない。しかし、主人公はそれを不当な運命だと感じて、神を探しに出かける。果たして運命を変えることができるのかという問題について、昔話は、すべてが首尾よく展開し、幸せな結末で終わるATU460Aと運命は結局変えられないものだというATU460Bの両極を提示している。ATU460のAとBの境は曖昧で分類も難しいとされるのだが、どちらのタイプでもまずは主人公が主体的に行動を起こすことが必要であり、眼目だろう。楽観的な昔話の世界観にふさわしく、いったんことを起こせば、不運から抜け出せるという方が多く、とくに東アジアではAタイプの話しか確認されていない¹⁷。ATU930のように予言で明らかにされた運命は変えようもないが、本人が自分で感じている程度の不運であれば、本人の意思と行動次第で変えることもできる、できてほしい、というのも、ヨーロッパ、東アジアの昔話に共通の運命観といえよう。

しかし、あえて言えば、ヨーロッパではセルビアの「運命」のように、人間が運命に関与する余地がアジアよりもやや多く残されているのであり、同じ理由からヨーロッパではATU930とATU461が組み合わせあって、KHM29「3本の金髪を持つ悪魔」のような話が多く存在するようになったのではないだろうか。

ATU930からは削除されているが、アールネ・トムソンの930番「予言」では、主人公と王女の結婚後も話が続き、王はある日の朝一番に特定の場所に主人公を行かせる一方で、その日、その場所に現れた最初の者を殺せと召使いに命じる。しかし、主人公は妻に引き留められたり、教会に立ち寄ったり、あるいは寝過ごして、遅れてしまう。そして、主人公の死を確かめに出かけた王が、そこに最初に現れた者として殺されてしまうのである。この展開だと、話の前半に引き続き、後半でも主人公の運の良さが予言の成就をもたらすことになって、ATU461のように主人公が主体的に活躍する余地がない。

「3本の金髪を持つ悪魔」の後半、すなわちATU461の「ほかの人や物の頼みごとを聞きながら異界へ赴き、答えを持ち帰る」というモチーフは、求婚者テストと組み合わせられているが、そもそもは自分の運命に不満をもって神に訴えに行くというATU460のモチーフに影響を受けているのではないだろうか。「運命に対する不満」という要素は、求婚者テス

17 ATUに挙げられている類話の数は、460Aが60、460Bは42である。

トと組み合わせられる過程でATU461からは消えてしまったが、異界への旅を思いつ動機が元々は運命に対する不満にあったために、同じく運命に抗うモチーフを含むATU930と親和し、「3本の金髪を持つ悪魔」のように前半では生まれつきの運が、後半では主人公の行為が予言の実現をもたらす話が成立したのではないかと推測される。ATU930の起源がインドであることはほぼ確実とされ¹⁸、異論はあるもののATU460もインド由来とする説があるのだが¹⁹、ATU461に関しては、その分布は基本的にヨーロッパに限定されるという²⁰。成立の過程については推測の域を出ない。だが、運命は変えられない、しかし、予言を成就するには人間の行動も必要だというATU930とATU461の組み合わせはいかにもヨーロッパらしい運命観を表現しているといえよう。

本稿では、ATU460、461、930に相当する昔話を用いて、ヨーロッパと東アジアにおける運命観を探ってきた。その過程で、日本の「山神と童子」は、主人公が自分の貧しい境遇を神に訴えにでかけるほどには不満に思っていないこと、神の方から人間界に出現すること、主人公は福を授けると神に約束されて異界に赴く、すなわち異界に招かれることなど、同じ東アジアの中韓の話と比べても独特であることが明らかになった。予言された運命を否定せずに利用しようとする「産神問答」の父親、炭焼きとの結婚をすなおに受け入れる「炭焼長者」の娘、福を授けられる「山神と童子」の息子など、日本の昔話は運命を厚く信頼しているようである。これがどのような世界観に由来するのか、何を意味するのかについての考察を今後の課題としたい。

参考文献

- 伊藤清司 『昔話 伝説の系譜 東アジアの比較説話学』 第一書房、1991年
稲田浩二 『昔話タイプ・インデックス』 同朋舎、1988年
ウター、ハンス＝イェルク 『国際昔話話型カタログ分類と文献目録』 小澤むかし話研究所、2016年
鶴野祐介編著 『日中韓の昔話 共通話型30選』 みやび出版、2016年
小澤俊夫 編訳 『世界の民話』 ぎょうせい、1985、1986、1999年
関敬吾 『日本昔話大成第3巻』 角川書店、1978年
関敬吾 『日本昔話大成第7巻』 角川書店、1979年
崔仁鶴・巖鎔姫編著 『韓国昔話集成3』 悠書館、2016年
日本民話の会・外国民話研究会編訳 『世界の運命と予言の民話』 三弥井書店、2002年
馬場英子ほか編訳 『中国昔話集1、2』 平凡社（東洋文庫761、762）、2007年
Bolte, Johannes/ Polivka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, Bremen 2012.
Brüder Grimm (hrsg. von Heinz Rölleke): Kinder- und Hausmärchen, Stuttgart 2016.
Ranke, Kurt (Hrsg.): Enzyklopädie des Märchens, Berlin・New York 1977-2015.
Röth, Diether: Kleines Typenverzeichnis der europäischen Zauber- und Novellenmärchen, Erlangen 2004.
Scherf, Walter: Das Märchen Lexikon, München 1995.
Uther, Hans-Jörg: The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography, Helsinki 2011.
Uther, Hans-Jörg: Deutscher Märchenkatalog. Ein Typenverzeichnis, München・New York 2015.
Uther, Hans-Jörg (Hrsg.): Deutsche Märchen und Sage 2.verb. Auflage, Digitale Bibliothek Band

18 Marzolph: a.a.O.

19 Schott: a.a.O.

20 Röth, Diether (2004) S.81.

8, Berlin 2004.

Uther, Hans-Jörg (Hrsg.): Europäische Märchen und Sagen, Digitale Bibliothek Band 110, Berlin 2004.

Uther, Hans-Jörg (Hrsg.): Märchen der Welt, Digitale Bibliothek Band 157, Berlin 2006.

Die Schicksalsanschauung im Märchen

— Ein Vergleich zwischen *dem Teufel mit den drei goldenen Haaren* (KHM29) und dem japanischen Märchen *Ubugamimondou*

Mizue Hosoya

In diesem Aufsatz werden die Märchen aus Europa und Ostasien behandelt, in denen der künftige Ehepartner der neugeborenen Hauptfigur geweissagt wird. Dazu gehören die Märchentypen ATU461 und 930. Bei diesen Typenvarianten und dazu noch ATU460 betrachten wir hier hauptsächlich das Grimmsche Märchen *Der Teufel mit den drei goldenen Haaren* KHM29 und vergleichen sie mit dem japanischen Märchen *Ubugamimondou* (Dialog der Schicksalsgötter).

Sowohl in Europa als auch in Ostasien ist das vorausgesagte Schicksal am Ende unabwendbar. Der Unterschied besteht aber darin, wie der Schwiegervater das Geschick seines glücklosen Kindes vermeiden will.

In Europa versucht der reiche Schwiegervater den nicht standesmäßigen armen Jungen zu ermorden, um seine Tochter von der vorausgesagten Heirat mit diesem zu schützen. Trotzdem überlebt der Junge dank seines Glücks. Nach der Hochzeit stellt der Schwiegervater erneut eine neue gefährliche Forderung an ihm, die er nun mit seiner eigenen Kraft erfüllt, und er erbt das Vermögen seines Schwiegervaters. Man verneint das ungünstige Schicksal und will ihm auf jeden Fall entgehen, was aber keinen Erfolg bringt. Wer mit dem Glück geboren ist, soll sich nicht nur auf sein Schicksal verlassen, sondern selbst seine Kompetenz zeigen.

In Japan verlobt der reiche Vater nach der Schicksalsverkündung sofort seinen glücklosen Sohn mit einem armen aber mit Glück geborenen Mädchen. Die beiden heiraten und leben zuerst wohlhabend. Nach einiger Zeit lässt sich aber der Mann von seiner Frau scheiden. Die Frau heiratet einen anderen Mann und wird reich und glücklich, während der Mann ohne Glück zugrunde geht. Hier reagiert man auch auf ein ungünstiges Schicksal nicht negativ, wenn man es wie der Schwiegervater gewusst hat, und es bringt einem Glück, sein eigenes Geschick zu akzeptieren und sich ihm zu ergeben.